

2005年2月11日金曜日、今でも鮮明にその日のことを覚えています。

岐阜県多治見市の空は抜けるような青空でした。寒風が吹いていましたが、挙式会場となる水上のステージは林に囲まれているので風の影響はあまりありません。

祝福の拍手に迎えられ、これから式を挙げるふたりが私

の前にすすんできました。打ち合わせのためこれまで何度も会っているので、私の前に立つふたりには緊張感がありません。笑顔すら見られました。また、水上に設えた挙式会場ということで、列席者も楽しんでいる様子でした。

列席者だけでなく、たまたまこのあたりに遊びにきていた人たちも、これから何が始

## 笑顔で結ばれた挙式

まるのだろうと興味津々の様子で水上のステージを見ています。

多治見市周辺では、まだまだシビルウエディングの挙式を挙げる人は少ないだけに、ミニスターを務める私は大変緊張していました。が、アウトドアということもあって、実際に式が始まるとその緊張が徐々に薄らいでいきました。

新郎新婦が力を合わせて考えた誓いのことばを読み上げると、列席者だけでなく“見物者”からも大きな拍手がわきおこりました。

無事挙式を終え、ミニスターの控室でひと休みしていると、さきほど夫婦となったふたりが部屋に入ってこられ、ふたりは異口同音に、「自分たちが望んでいたすばらしい司式をやっていただきありがとうございます」と、私の手を握り、涙を流しながら礼を述べるのです。そのことばに、私の胸は熱くなり、三人で感激の涙を共有しました。

数日後、私はふたりから礼状を頂戴しました。おぎなりの礼状ではなく、“宝”として大切にとっておきたいような文言が書中にちらばっている礼状でした……それを読んで私は、「シビルウエディング・ミニスター冥利に尽きる」と、もう一度、挙式当日の控室での感動を味わいました。

地方都市ですから、それからふたりに会う機会がありました。先日お会いしたとき、というよりふたりが、すでに勤務先を定年退職した私を訪ねてきて、年内に待望の二世誕生のうれしい知らせを告げました。

挙式を司った者として、これほどうれしいことはありません。

在職中に私が司った挙式組数は17組と少ないのですが、その都度、「ミニスターは心の仕事」と考え、誠意をもってやってきたことがこのような喜びをもたらしてくれたのだと思っています。



シビルウエディング・ミニスター  
永瀬重吉氏

(ながせ・しげよし。1941年-島根県生まれ。東レ(株)グループを経てシティホテル美濃久茂勤務。2009年退社)

